

中世朝鮮語の지라系語尾に関するいくつかの問題

中島 仁

본고의 목적은 중세한국어의 지라계 어미를 둘러싼 몇 가지 문제에 대해 고찰하는 것이다. 지라계 어미에는 ‘-아/어지라, -아/어지이다, -가/거지라, -가/거지이다’가 있는데 본고에서는 15세기 자료에 나타난 예를 중심으로 이들 어미가 가지는 의미, 아/어계 어미와 가/거계 어미의 대립, 그리고 -가/거지라, -가/거지이다에 나타나는 -가-와 -거-의 대립에 중점을 두고 고찰하였다.

지라계 어미가 가지는 의미는 선행연구에서 ‘소망, 욕망, 청원’ 등 다양하게 언급되어 왔다. 본고에서는 지라계 어미가 실현하는 의미, 주어의 인칭, 동작 주체 등 여러 면에서 분석한 결과 지라계 어미가 나타내는 의미를 ‘화자의 원망[願望]’이라고 결론지었다. 지라계 어미는 그 발화를 듣는 사람에게 화자가 바라는 어떤 행동을 해 주도록 요청하는 문맥에서도 사용된다. 또한 화자 자신이 하고자 하는 행동에 대한 허가를 요구한다는 기능도 가지고 있다. 그러나 그것은 어디까지나 지라계 어미가 가지는 원망[願望]이라는 의미에서 파생된 것일 뿐 지라계 어미의 본질적인 의미는 아니다.

‘아/어’와 ‘가/거’의 대립에 대해서는 ‘아/어’가 타동사와 ‘가/거’가 비타동사와 결합하는 형태임을 자료 분석 결과를 제시하면서 밝혔다. 약간의 예외에 대해서도 자세히 언급하였다.

-가/거지라, -가/거지이라에 나타나는 -가-와 -거-의 대립에 대해서는 -가-를 흔히 의도법이나 인칭법의 선어말어미라고 불리는 ‘-오/우-’와 ‘강조, 강세, 가상, 완료’ 등을 나타낸다고 하는 시상의 접미사 -거-가 결합한 형태로 보지 않고 용언 어간의 모음에 따라 선택되는 모음조화에 의한 교체형이라고 보았다.

1.はじめに

中世朝鮮語¹⁾には ㄹ 지다/ ㄹ 야다, ㄹ 거사/ ㄹ 야사, ㄹ 거든/ ㄹ 야든, ㄹ 거니와/ ㄹ 야니와, ㄹ 거늘/ ㄹ 야늘のように, 가/거系の語尾と아/어系の語尾の対立が見られるものがある。これら様々な語尾にあらわれる가/거と아/어의対立については、現在まで様々な角度から論じられてきた。本稿ではその中でも特に지라系語尾²⁾を取り上げて考察したい。지라系語尾は以下のような体系をなす：

		対下形	対上形
①	아/어系	-아/어지라	-아/어지이다
②	가/거系	-거지라, -가지라	-거지이다, -가지이다

本稿では지라系語尾をめぐる問題のうち, 지라系語尾のあらわす意味, 上記①類と②類の用法の違い, ②類の거と가의対立について, 従前の議論の検証と検討を行い, 本稿の見解を述べる。その際, 用例の統計的なデータを提示し, 今までの研究では詳しく論じられていない例外に対しても, できる限り詳細に記述し, 検討を加えていく。

2. 先行研究

지라系語尾の意味について, 고영근 (1987:333-334) は「'-어지라/-거지라' は話者の所望[望み]をあらわす特殊な平叙形語尾」であるとし“所望平叙文”と名づけた。志部昭平 (1990:52,106) はこれを「欲望法語尾」とし, 「常に第1人称の主語と共に現れ, 話者自身の欲望を表す」とした。また, 志部昭平 (1986-87) は「願望法語尾」と名づけ, 「自分自身の行動や状態について願う(欲望)」としている。安秉禧・李琬鎬 (1990:247) は話者自身の願いをかなえて欲しいという「請願」の意味を持つとしている。장윤희 (2002:132) は지라系語尾を「話者の所望を表現する所望法終結語尾」と見た。

次に아/어と가/거の問題についてである。まず, 유창돈 (1963) が '-거-, -아/어-, -나-' の3つの形態が同じ機能を持つ対応形態であることを明らかにし, 「-거, -어」について「“-거, -어”の使用は話者の任意に従い随意的に連結される形態であるとするしかない」と結論付けた。また, -거지라, -아/어지라について유창돈 (1963:19) では「-거, -어」が「所望の先行語尾“-지-”と複合語尾を形成するが, この時も強意の機能を作用するほかに何もない」とした。

허웅 (1975:431) は지라系語尾について, 「「-거」と「-아/어」は主用言(으뜸풀이씨)の種類により選択されるようでもあるが, 次の例を見るとそう速断するのも難しくなる」とし, 楽章歌詞の例をあげている。また, 翻訳文の「모든 놀람과 저흥 업거지이다(龍飛御天歌下140)」が, 口訣文では「無諸驚懼々야지이다」となっていることから, 用法に特別な点が無かったようだと結論付けている。

高永根 (1980) では-거-と-아/어-の対立が見られる語尾を網羅的に扱い, その対立について非常に精密な考察を行っている。高永根 (1980:57) では거/어/나의交替条件を「'거'は自動詞, 形容詞及び指定詞, 即ち非他動詞に, '어'は他動詞に, '나'は'-오-'の下で各々使われる」とし, -거-と-아/어-の対立が他動:非他動の対立であるとの結論を出した。-거지라については, これを可可型³⁾に分類しほぼ例外なく-거-, -아/어-の対立が他動:非他動の対立をあらわしたと言及している。この結論は現在も広く韓国で受け入れられている。

塩田今日子 (1985) はアスペクト的観点から-거늘と-아/어늘の対立を中心に考察した。そ

して、-거늘の aspekts 的意味を「ある用言の意味することがらを、その主体に関して持続性をもったものとして捉えること」、-아/어늘の aspekts 的意味を「用言の意味する動作を、ひと纏まりの終了したものとして捉えること」と捉えた。そして、「-거늘と-아/어늘の分布が形容詞、自動詞、他動詞といった範疇と関係があるように見えるのは、これは以上に述べたような、-거늘と-아/어늘の持つ aspekts 的な意味に起因するのであって、-거늘と-아/어늘が、形容詞、自動詞、他動詞といった範疇の直接的な標識だからではない」と述べ、高永根(1980)の結論を否定した⁴⁾。

安秉禧・李珖鎬(1990:248)は-아/어-と-가/거-の区別が自他動によるものとした上で、この区別は16世紀初に混乱していたと述べている。

次に-가지라/-가지이다と-거지라/-거지이다の対立についてである。유창돈(1963:33)では-거-と-가-の対立について「-거-だけは統辞上の制約を受けて主体叙述語では-가-に代替することがある。しかしこれも絶対的ではなく、正音初期に既に崩壊していた」との言及が見られる。허용(1975)の基本的態度は、-가-が-거-と-오/우-の結合した形態であり、その対立が人称の区別をあらわしているというものであるが、「ある場合にはこの対立が人称の区別をあらわさないことがある」ともしている。허용(1975:805)ではこの対立にどのような差異があるのかは言及せず、「[지라, 지이다]は望みをあらわす補助用言(도움말이씨)であるため、このような言葉はみな話者自身の望み(所望)をあらわしているにもかかわらず、[-가-]と[-거-]の2種類が使われている」と述べ、その例をあげ後日の研究を待つという態度を示している。장윤희(2002:133)は「'-거지라'と'-가지라'の交替は先語末語尾'-오-'の統合与否によって説明できない」ものであるとし、「'-가지라'は結局'-거지라'の母音調和による交替形と見ることができる」としている。

3. 研究に使用する資料

本稿では安秉禧・李珖鎬(1990:248)に16世紀には-거-と-아/어-の区別が混乱していたという言及もあるため、15世紀の資料を中心に考察を行うこととする。16世紀以降の例については必要がある時に触れることとする。本稿で用例を収集するのに利用した資料、刊年、略号、用例数は以下の通りである。収集された지라系語尾の総数は149例である：

【表1】用例収集に用いた資料名・略号一覧と用例数

資料名	刊年	略号	用例数
龍飛御天歌	1447年	[龍飛]	1
釋譜詳節	1447年	[釋詳]	15
月印釋譜	1459年	[月釋]	69
楞嚴經諺解	1461年	[楞嚴]	2
妙法蓮華經諺解	1463年	[法華]	3
金剛般若波羅蜜經	1464年	[金剛]	0
禪宗永嘉集諺解	1464年	[禪宗]	9
阿彌陀經諺解	1464年	[阿彌]	0
圓覺經諺解	1465年	[圓覺]	3
救急法諺解	1466年	[救法]	0
蒙山和尚法語略録諺解	1467年	[蒙山]	0
牧牛子修心訣	1467年	[牧牛]	0
内訓	1475年	[内訓]	4
分類杜工部詩 初刊本	1481年	[杜初]	5
三網行實圖	1481年?	[三網]	20
金剛經三家解	1482年	[金三]	0
南明集	1482年	[南明]	0
觀音經	1485年	[觀音]	1
救急簡易方	1489年	[救簡]	0
眞言勸供	1496年	[眞勸]	6
六祖大師法寶壇經諺解	1496年	[六祖]	11
合 計			149

4. 지라系語尾の持つ意味と機能

先行研究では지라系語尾のあらわす意味は、話者の「所望、欲望、請願」などであるとされてきた。願いや望みといったものをあらわすという点では一致しているが、それぞれ少しずつ意味が異なる。ここでは지라系語尾がどのような意味をあらわしているのか詳細に見ていきたい。

李賢熙(1988,1994)にあるように, 지라系語尾は請願構文にあらわれることがある。以下の例のように「願き다」, 「請き다」, 「빌다」が上位文にあらわれ「願, 請, 祈/乞」といった意味をあらわしていることがわかる:

- (1) 願키 습노니 이제 果를 得키야 寶王이 ㄷ외야 이 곧 恒沙衆을 도로 濟度키야지이다 (楞嚴3:112b)
願わくは「今果を得て宝王になり、このような恒沙衆を逆に濟度したいのです。」
- (2) 田稷子 | 붓그려 나가 그 金 도로 보내오 宣王의 제 罪를 술와 죽가지이다 請키야늘 (内訓3:25b)
田稷子が恥ずかしかって出て行き、その金を送り返し宣王に「自分の罪を申し上げ死にたいです」と請うと
- (3) 王薦의 아버 病이 되어늘 王薦이 바미 하랴고 비스보던 내 나홀 더러 아버를 주어지이다 키더니 (三綱孝30)
王薦の父が病氣になったが、王薦が夜に天に祈るには「わたしの年を減らし父にあげたいのです」と言ったのだが

同時に李賢熙(1988)は-고저と지라系語尾をとりあげ、前者が内的話法的性格を持ち、後者が外的話法的性格を持つとした。つまり、지라系語尾は直接引用文に用いられ、「話者」の願いや望みをあらわしているということになる。

また、これと関連して、志部昭平(1990:55)では「常に第1人称と共起し話者自身の「～シタイ」という欲望を表現するのに用いる」としているが、지라系語尾をとる用言は3人称の主語をとることも可能である。2人称の主語があらわれた例はなかったが、例があらわれなかっただけで、3人称と同様に可能であったと思われる：

- (4) 后 | 病키엿거시늘 帝 좀자삼과 飲食을 便宜히 묻키샤 群臣더러 니르신대 群臣이 山川에 빌며 일흥난 醫員을 두루 求키야지이다 請키습거늘 (内訓2:111b)
后が病んでいらしたが、帝寝ることと飲食を便宜にできず、群臣におっしゃるには「群臣が山川に祈り、名のある医員をあまねく求めて欲しいのです」と請うが
- (5) 願키스오디 이 功德으로 一切에 너비 미쳐 우리와 衆生이 다 佛道를 일워지이다 (法華3:126a)
願わくは、「この功德で一切に広くおよび、我々と衆生がみな仏道をなすようにしてほしいのです。」

ただし、その場合もそれを望んでいるのが話者自身であることには他の例と変わりはない。このような例から、지라系語尾と結合する用言には、その動作主体に制限がなく、지라系語尾は動作主体がその動作をすることを、話者が望んでいることをあらわす形式であることがわかる。即ち、話者自身がそうしたいという意志ではなく、そのようになってほしいという「願望」をあらわしているのである。

また, 장윤희 (2002:186-187) では지라系語尾があらわれた資料の該当部分が, 他の文献でどのようにあらわれたかを考察している。장윤희 (2002:186) であげられている例に, 日本語訳を付して引用すると以下のようなものである:

(6) (一切衆生喜見菩薩 … 아바닛괴 솔보디) 大王하 내 이제 이 부텃괴 供養 하 바 지 이다 (月釋18:34b)

(一切衆生喜見菩薩 … 父に申し上げるに) 「大王よわたしが今この仏に供養いたしたいです」

(6') (一切衆生喜見菩薩 … 아바닛괴 솔보디) 大王하 내 이제 도로 가 이 부텃를 供養 하 바 리 이다 (釋詳20:14a)

(一切衆生喜見菩薩 … 父に申し上げるに) 「大王よわたしが今再び行き, この仏を供養いたします」

(6'') (一切衆生喜見菩薩 … 아바닛괴 솔오디) 大王하 내 이제 반드기 이 부텃를 도로 供養 하 오 리 이다 (法華6:148a)

(一切衆生喜見菩薩 … 父に申し上げるに) 「大王よわたしが今必ずこの仏を再び供養いたします」

(7) 韋提希 請 하 바 淨土에 나 거 지 이다 (月釋 8:1a)

韋提希が請して「淨土に生まれたいです」

(7') 韋提希 夫人이 世尊의 솔보디 淨土에 가아 나 고 저 하 노 이다 (月釋 8:5a)

韋提希夫人が世尊に申し上げるには「淨土に行き, 生まれたいと思います」

(8) 寶塔이 높고 머르실씩 부텃를 븐즈바 보 하 바 지 이다 하 시 니 尊敬을 나토산 쁘 디 라 (釋詳 20:44b)

宝塔が高く遠いので, 仏をつかまえ「お目にかかりたいです」とおっしゃったが, 尊敬をあらわされたのである

(8') 寶塔이 높고 멀씩 부텃를 븐즈바 보 하 고 저 하 시 니 尊敬을 나토시니라 (月釋 18:80b)

宝塔が高く遠いので, 仏をつかまえお目にかかりたいとおっしゃったが, 尊敬をあらわされたのである

ここからも지라系語尾が, 話者の「意図」や「意志」をあらわす-고저, -오리라と類似した意味を持つことがわかる。ただし, -고저, -오리라などと比較した場合, 지라系語尾は単純に話者の願望をあらわすのではなく, 聞き手にそのような願望が成就するように行動することを要請するという意味を包含するという特徴を持つ⁵⁾。次の例を見てみよう:

- (9) 闍耶 | 라 호리 … (中略) …毗闍耶 | 라 호리를 드러 닐오디 내 네 우희 올라 부터
의 布施보스바지라 ㅎ야늘 毗闍耶 | 깃거 부뎃 알피 굿거늘 (釋詳24:8a)
闍耶という者が… (中略) …毗闍耶という者に向って曰く, 「わたしがお前の上
にのほり仏に布施いたしたいのです」と言うと, 毗闍耶が喜んで仏の前にかがんだのだ
が
- (10) 阿難이 내드라 ㅎ 수프레 가 안자이서 上地定을 니겨 혀근 結을 다 떠러버려 阿羅漢
果를 證고 結集호는 門 밖과 와 들아지라 ㅎ야늘 (釋詳24:3a)
阿難が飛び出しある林に行き座っており, 上地定に慣れ小さい結を皆払い落としてし
まい, 阿羅漢果を悟り, 結集している門の外に来て「入りたい」と言う

これらの例では, 話者がただ単に「布施さだ」, 「들다」という動作をしたいと願っている
のではなく, その願望に対する聞き手の反応を期待し, それに対し何かをしてくれることを暗示
している。(9)の例では, 実際に毗闍耶が話者の望みを行動に移していることが文脈からは
はっきりとわかる。

また, 次の例のように지라系語尾と結合する動詞の動作を行いたいという話者の願望をあら
わしつつ, 同時にそのための許可を要請するという意味を内包する場合もある:

- (11) 부데 이에 와 減度호심싼명 우리히도 스승니미실씨 舍利를 비스바다가 塔 立て 供養
호스바지이다 (釋詳23:52b)
「仏がここに来て減度なさっても, 我々にも師匠でいらっしゃるので, 舍利を得て塔
を立て供養いたしたいのです。」
- (12) 大愛道 | 머리 좃스바 禮數호습고 솔보디 나는 드로니 겨집도 精進호면 沙門人 四道
를 得호는다 홀씨 부뎃 法律을 호스바 出家호야지이다 (月釋10:16b)
大愛道が頭を下げ礼数し上げるには「わたしは聞いたが女も精進すれば, 沙門の
四道を得るというので, 仏の法律をお受けして出家したいのです。」

(11)は波波国から来た人が, 拘尸国で減度した仏を供養する許可を求める文脈であり, (12)
は女である大愛道が出家する許可を仏に求めている場面である。

行動の要請や許可の要請という意味は, 지라系語尾が直接引用文で用いられる, つまり聞き
手に対して, 話者が自分自身の「願望」を表現していることから派生した副次的な意味である
と考えられる。そのため, 「請」という意味は지라系語尾の持つ本来の意味ではなく, 「願」
や「望」が지라系語尾の持つ本来の意味であると言えるのである。本稿では지라系語尾の意味
を, 「話者の願望」をあらわすものであると結論付ける。

5. 가/거와아/어의交替について

本稿で収集した全用例を，語尾と品詞ごとに分けて提示すると表2の通りである：

【表2】語尾と品詞の関係

語尾	自動詞	他動詞	形容詞	不明	合計
-가지라	15	1	0	0	16
-가지이다	19	0	1	0	20
-거지다	2	0	0	0	2
-거지이다	6	0	0	0	6
-나지라	2	0	0	0	2
-나지이다	1	0	0	0	1
-아지라	3	14	0	1	18
-아지이다	5	75	0	3	83
-으지이다	0	1	0	0	1
合計	55	91	1	4	149

가/거系語尾は44例あるが，自動詞以外と結合したのは以下の2例のみである。

(13) の例は「스시를 (間を)」という対格をとる体言があるが，「외를 머거지라 (瓜を食べたい)」(三綱 孝30) のような例に比べると他動性が弱く，自動詞と認識したともとれる。(14) の「근다」は形容詞に分類したが，「갈가지이다」の意味は「갈아지기를 바란다」ということであり，自動詞にも分類されうるものである：

(13) 그 比丘 | 두리여 울며 날오디 나를 호 님 스시나 살아 뒷다가 주기쇼셔 모딘 노미
 들디 아니홀씨 이 양으로 낫 數를 漸漸 조려 날웁 스시를 살아지라 ㅎ야늘 (釋詳
 24:15a)

その比丘が恐れ，泣いて曰く「わたしを一ヶ月生かしておいて殺してください。」悪い者が聞かなかったが「このように日の数を漸漸減らし7日間を生きたい」と言うと

(14) 부테 ㄷ외야 일후미며 眷屬이며 時節이며 處所 | 며 弟子 | 며 다 이젯 世尊근가지이
 다 ㅎ니 그 廣熾는 우리 世尊이시니라 (月釋2:9b)

「仏になり名前や眷属や時節や処所や弟子全て今世尊と同じになりたいのです」と言ったが，その廣熾は我々の世尊でいらした

このように考えれば，가/거系語尾は例外なく自動詞のみと結合し，-거-が非他動詞と結合するという高永根 (1980) の主張と完全に一致する。本稿でも基本的に고영근 (1980) と同一の

立場をとる。

しかし、-아/어-の場合は他動詞との結合例が優勢ではあるが、自動詞、他動詞の両方との結合例があらわれている。これについては、さらに詳細な検討が必要である。ここで、自動詞と아/어系語尾が結合した例をあげながら、他動詞と結合するはずの아/어系語尾が自動詞と結合した理由について考えてみたい。

まず、「오다」との結合例は3例あるが、そのうち(15)は「얻다」と合わせ「어더오다」全体で他動詞とみなせる。その他の2例は『三綱行實圖』の異なる部分にあらわれる同じ文脈で用いられたものであるが、これは自動詞と結合したと見る他ない：

- (15) 惡友太子 | (中略) 喜야 父母의 슬보되 나도 善友 조차가 보비 어더 오나지이다
(月釋22:37a)

惡友太子が(中略)と言い、父母に申し上げるに「わたしも善友を追って行き宝を得て来たいです」

- (16) 神靈이 날오되 하늘 喜시논 이리라 문 免喜리라 喜야늘 吳二 어미 놀랐가 너겨 아
즈미 밥 喜야 이받고 누의 지비 값간 너러오나지라 喜야늘 (三綱孝11, 29)

神靈が曰く「天のなさることで免れないであろう」と言うと、吳二の母が驚くと思い、朝に食事を作りごちそうし「某の家に少し行って来たいです」と言ったが

次に、他の-아지라, -아지이다との結合例を見してみる。(17)の動詞は「卜居喜다」であるが、「住居を決める」という意味から他動詞と判断され、-아지라との結合が選ばれたと考えられる。また、(18)の「出家喜다」も同様に考えることが可能である。「出家喜다」の例は(18)以外に2例あらわれた。それ以外の例は他動詞と考えることは不可能であり、例外と見るしかない：

- (17) 李邕이 내 々출 아라지라 求喜고 王翰이 이우제 와 卜居喜야지라 願喜더라 (杜詩
19:1b)

李邕がわたしが顔を知りたいと求め、王翰が隣に来て「卜居したいです」と願ったのだ

- (18) 太子 | 보시고 더욱 식트시 너겨 喜더시다 太子 | 즈조 王의 出家喜야지이다 畚거시늘
(釋詳3:23a)

太子がご覧になり、一層うんざりなされた。太子が頻繁に王に「出家したいです」と申し上げなされたが

- (19) 願喜야 날오되 내 後生에 長常 그뎡 겨지비 득외야 道훈 이리여 구즌 이리여 갈아 나
디 마라지라 喜거늘 (月釋20:84a)

願い曰く「わたしが後生に長常あなたの妻となり、よいことや悪いことが分かれないでほしい」と言うので

- (20) 比丘 | 슬허 눈물 흘리며 비로디 내 저근덜 호 돌만 사라지라 (月釋25:77a)
比丘が悲しみ涙を流し祈るが、「わたしが少しの間、1ヶ月だけ生きたい」
- (21) 太子 | 檀波羅蜜을 호고져 호야 王의 솔보디 두루 나 노너지이다 (月釋20:63a)
太子が檀波羅蜜をしようとし王に申し上げるに「広く生まれ遊び歩き回りたいです」
- (22) 홀른 惡鹿王 무렛 샷기 빈 사스미 次第 다둔거늘 그 사스미 惡鹿王의 솔보디 샷기 나코 즉 가지이다 (月釋4:64a)
一日は惡鹿王の群れの、子どもを身ごもった鹿が次第に到着したが、その鹿が惡鹿王に申し上げるには「子を産みすぐに行きたいです。」
- (23) 더 兇人이 王의 널오디 王의 願을 비습노니 아피어나 예 든 사르미 나디 묻게 호야 지이다 (月釋25:76b)
その兇人が王に曰く「王に願をかけましたが、誰でもここに入った人が出られないようにしたいのです。」

지라系語尾のうち, 가/거系語尾は後期近代朝鮮語の時期にほぼ消滅し, 現代朝鮮語では「-아/어지이다」に統一される。-거늘, -아/어늘の場合のように, 現代朝鮮語で-거늘という가/거系の語尾が残っているのは状況が異なるのである。지라系語尾가아/어系語尾に統一されていくのであれば, 가/거系語尾と結合するはずの自動詞가아/어系語尾と結合した例が多くあらわれるのは自然なことであると言える。これらの例外は, 지라系語尾가아/어系語尾に統一されていく, その変化過程を見せてくれているものであり⁶⁾, 中世朝鮮語の段階では, 基本的に아/어系語尾が他動詞と, 가/거系語尾が非他動詞と結合すると結論づけられるであろう。

6. -가-と-거-の対立

中世朝鮮語において, -가-と-거-の対立は, -가-が強調, 強勢, 仮想, 完了などをあらわすと言われる時相の接尾辞-거-と「意図法」や「人称法」の先語末語尾と言われる-오/우-⁷⁾が結合した形であるという見解が一般的である。志部昭平(1986-87, 1990)によれば, 中世朝鮮語の時相の接尾辞は以下のような体系をなす:

【表3】 中世朝鮮語の時相の接尾辞

語基	不定	現在	回想	強勢	完了
I	∅	-ㄴ-	-더-	-거-	-
II	-으/으-				
IV	-오/우-	-노-	-다-	-가~과-	-
III	-	-	-	-	-아/어-

つまり、上の表の網掛け部分の対立であるという見解である。しかし、その様相は-거-があらわれる語尾により異なるため、고영근 (1981;1998:42-43) の指摘のように、지라系語尾の場合-가-가-거-と-오/우-が結合した形であるとはできないと考えられる。

その理由はいくつかが考えられる。まず、「*키지라」という形を例にあげれば、거がない*키지라という形は存在せず、「*키-지라」とう環境で-거-の代わりに時相の接尾辞である-ㄴ-, -더-が用いられることもない。また、5章で論じたように아/어系語尾と가/거系語尾が他動詞：非他動詞という対立をあらわすのであれば、それが時相の接尾辞であるという議論は不可能であることは明白である。言い換えれば、-아/어지라, -아/어지이다, -거지라/가지라, -거지이다/-가지이다はそれぞれ独立した語尾であり、単一の形態素であるため、それ以上分析することはできないのである。

장윤희 (2002:133) でも「'-거지라' と '-가지라' の交替は先語末語尾 '-오-' の統合と否によって説明できない」ものであるとし、「'-가지라' は結局 '-거지라' の母音調和による交替形と見ることができる」としている。仮に가系と거系の語尾の選択が、母音調和によるものであるとしても、より注意深い考察が必要であろう。次に、지라系語尾における-가-と-거-の対立が、장윤희 (2002) の言うように母音調和にあるのかを詳しく考察してみることにする。

用言と가/거系語尾の結合関係を示すと、次の表4の通りである：

【表4】 用言と가/거系語尾の結合関係

語幹	用言	-거지라	-거지이다	-가지라	-가지이다	合計
陽母音 語幹	나다	0	0	0	8	8
	살다	0	0	3	1	4
	근다	0	0	0	1	1
陰母音 語幹	없다	0	1	0	0	1
	죽다	0	0	6	5	11
	들다	0	1	1	1	3
中立 母音	드외다	1	0	5	4	10
	니다	1	4	0	0	5
	길다	0	0	1	0	1
合計		2	6	16	20	44

-거지라/가지라, -거지이다/-가지이다においては, 가系が優勢であり, 陽母音語幹の用言に-거지라/-거지이다が結合した例は1例もあらわれていない。逆に, 陰母音語幹の用言に-가지라/-가지이다が結合した例が多く見られる。-가-系が優勢であるという点も時制の接尾辞である-거-の場合とは逆の現象である⁸⁾。このことから, -가-と-거-が時相の接尾辞であることが否定される。

中立母音「ㅣ」の場合, 一般的に母音調和において, 語尾は陰母音が選択されることが多い。しかし, 「ㄷ외다」は-아/어-と結合する時, 陽母音が選択され「ㄷ외야」となる。そのため, 가/거系の場合も陽母音である-가지라/-가지이다が多く選択されていると考えられる。「니다」に거系の語尾が結合しているのは問題ない。ただし, 「길다(延)」は例外と言わざるをえない。

最後に, 陰母音語幹の用言に-가지라/-가지이다が結合した網掛けの部分の13例を見てみよう。「죽다」は11例全てが母音調和に背く結果であり, 「듣다」は3例中2例が母音調和に背いている。「죽다」の場合, 11例中9例が『三綱行實圖』にあらわれた例であり, 用例があらわれた資料に偏りが見られる。5章で述べた自動詞である「오다」が아/어系の語尾を選択した場合もそうであるが, 『三綱行實圖』には他の文献に比べ, 例外とみなされる例が多くあらわれる。『三綱行實圖』に가/거系語尾は12例あらわれるが, 母音調和を遵守しているものは1例しかない。これらの例外は資料の性格⁹⁾に起因するものではないかとも考えられる。

16世紀資料を見てみると, 「죽다」の場合, 下の例のように『續三綱行實圖』(1514年)や『二倫行實圖』(1518年)にも지라系語尾と結合した例があらわれる。16世紀には가系の語尾自体が消滅した状態にあり, 「죽다」も全て-거지라と結合している:

- (24) 강평이 계광과 들헤 나갓다가 도죽달 맛나 주교려 커늘 형데 서르 내 죽거지라 ㄷ토
온대 도죽기 갈홀 간슈호고 닐우디 (二倫 9a)
カンゲンがケガンと野に出かけて行き盜賊に会い殺そうとしたが, 兄弟が互いに「わ
たしが死にたい」と争うので, 盜賊が刀を納めて曰く
- (25) 쇠 밧디 아니호야 새도록 자디 아니코 大便을 맛보며 향 뛰오고 하늘쇠 비로디 갑새
죽거지라 호더라 (續三 孝29a)
帯を解かず, 夜通し眠らず, 大便の味を見て, 香を炊いて天に祈るに「代わりに死に
たい」と言った。

その他に가系と거系の語尾の選択が, 母音調和によるものである論拠の1つとしてあげられるものに, 지라系語尾の体系がある。その体系を示すと以下のようになる:

【表5】지라系語尾の体系

	陽母音	陰母音
他動詞	-아지라/-아지이다	-어지라/-어지이다
非他動詞	-가지라/-가지이다	-거지라/-거지이다

아/어系と가/거系の対立が他動詞：非他動詞の対立をあらわし，他動詞と結合する-아지라と-어지라が母音調和による交替を見せる。そうなれば，非他動詞に結合する-가지라と-거지らは，他動詞に結合する-아지라と-어지라が母音調和による交替をするように，母音調和により交替すると考えるのが語尾の体系を見ても自然である¹⁰⁾。

以上のことから，本稿では지라系語尾における-가-と-거-の対立は母音調和によるものであると結論付けたい¹¹⁾。

7. おわりに

以上，中世朝鮮語の지라系語尾に関するいくつかの問題について見てきた。それをまとめることで結びに代えたい。지라系語尾のあらわす意味は，先行研究では「所望，欲望，請願」など様々に呼ばれてきたが，相手の行動や自分の行動に対する許可の要請などの意味は副次的なものであり，지라系語尾があらわす根本的な意味は「話者の願望」であることを明らかにした。아/어系語尾と가/거系語尾の対立については，지라系語尾が結合する用言の他動詞：非他動詞の対立をあらわすとし，例外についても詳しい検討を加えた。-가-と-거-の対立については，아/어系語尾と同様に，母音調和によるものであると結論付けた。

本稿では分析の統計的なデータもできるだけ提示し，例外と呼ばれる例についても詳しい分析を試みた。母音調和の問題が特にそうだとと言えるが，今後はこれを中世朝鮮語の語尾の体系という大きい枠の中でとらえ，見ていくことが残った課題である。

参考文献

- 高永根 (1980), 中世語의 語尾活用に 나타나는 '지/어' 의 交替에 대하여, <國語學>9, 서울: 國語學會
- 고영근 (1981;1998), <중세국어의 사상과 서법 보정판>, 서울: 탐출판사
- 고영근 (1987), <개정판 중세국어문법론>, 서울: 집문당
- 高永根 (1999), <國語形態論研究 (增補版)>, 서울: 서울대학교출판부
- 金英培 (1972), <注解 釋譜詳節 [第23·24]>, 서울: 一潮閣
- 나카지마 [中島仁] (2003) 관형사형에 나타나는 '-오/우-' 의 기능, <國語學>42, 서울: 國語學會
- 文獻硏究會 (1994), <釋譜詳節 文法形態 索引集>, 서울: 太學社
- 시오타 [鹽田今日子] (1993) 중세국어 '-거' 와 '-아/어-' 의 Aspect 적 의미의 차이- '거늘' 과 '-아/어늘' 의 용례를 통하여-, <國語史 資料와 國語學의 硏究>, 서울: 文學과知性社
- 安秉禧 (1992), <國語史資料硏究>, 서울: 文學과知性社
- 安秉禧·李琬鏞 (1990), <中世國語文法論>, 서울: 學研社

- 梁柱東 (1942), <古歌研究>, 博文出版社, 増補版 (1975) 一潮閣
- 유창돈 (1963), 선행어미 (先行語尾) “-가/거-, -아/어-, -나-” 고찰, <한글>132, 서울:한글학회
- 劉昌淳 (1964), <李朝語辭典>, 서울: 延世大學校出版部
- 李基文 (1998), <新訂版 國語史概說>, 서울: 太學社
- 李崇寧 (1960), Volitive form으로서의 Prefinal ending ‘- (O/U) -’ 의 介在에 대하여, <震檀學報>21, 서울: 震檀學會
- 李賢熙 (1988), 중세국어의 請願構文과 관련된 몇 문제, <語學研究> 第24卷 第3號, 서울: 서울大學校 語學研究所
- 李賢熙 (1994), <中世國語 構文研究>, 서울: 新丘文化社
- 장윤희 (2002), <중세국어 종결어미 연구>, 서울: 太學社
- 한제영 (2002), 중세국어 선어말어미 ‘거/어’ 의 문법, <문법과 텍스트>, 서울: 서울대학교출판부
- 히용 (1975), <우리 옛말본-15세기 국어 형태론- >, 서울: 샘문화사
- 홍윤표 (1994), <근대국어연구 (I) >, 서울: 태학사
- 塩田今日子 (1985) 「中期朝鮮語の接続形語尾-거늘と-아/어늘について」, 『朝鮮學報』 第 114輯, 天理: 朝鮮學會
- 志部昭平 (1986-87) 「中期朝鮮語 1-4」, 『月刊基礎ハングル』 8-11, 東京: 三修社
- 志部昭平 (1990) 『諺解 三綱行實圖研究』, 東京: 汲古書院
- 中島仁 (2002) 「中期朝鮮語의 ‘-오-’ について-一體形の場合-」, 『朝鮮語研究 1』, 東京: くろしお出版

- 1) 本稿では朝鮮語史の時代を홍윤표 (1994:28) に従い, 次のように区分する。ただし, 本稿では「國語」という単語を「朝鮮語」にかえて使用することにする。
 - 古代朝鮮語 (~9世紀末) (三国, 統一新羅時代)
 - 中世朝鮮語 前期 中世朝鮮語 — (10世紀~13世紀末) (高麗時代)
 - 後期 中世朝鮮語 — (14世紀~16世紀末)
 - 近代朝鮮語 前期 近代朝鮮語 — (17世紀~18世紀 中盤)
 - 後期 近代朝鮮語 — (18世紀 中盤 以後~19世紀末)
 - 現代朝鮮語 (20世紀初~現在)
- 2) 本稿では-아/어지라, -아/어지이다, -거지라, -가지라, -거지이다, -가지이다を, 便宜上まとめて「지라系語尾」と呼ぶ。また, -아/어지라, -아/어지이다を「아/어系語尾」, -거지라, -가지라, -거지이다, -가지이다を「가/거系語尾」と呼ぶことにする。
- 3) 「-거-」が非他動詞に, 「-아/어-」が他動詞と結合するという条件の適応可能性の可否をあらわしている。可可能型, 可不可能型, 不可可能型, 不可可能型があり, 「可」は結合が規則的であること, 「不」は結合が不規則的であることをあわらす。左側の「可/不」が「-거-」との結合, 右側の「可/不」が「-아/어-」との結合をあらわす。
- 4) 塩田今日子 (1985:59) では지라系語尾について以下のような言及がある。

用例が少なく判断の難しい例ではあるが, -거지라と-아/어지라の場合, -거지라가形容詞及び自動詞に, -아/어지라가他動詞につくという報告があり, 筆写の結論に照らせば可能なはずの, “動作の継続”を表わす-거지라가欠如しているが, これについては, 次のような説明が可能である。すなわち, これらの語尾は願望を表わすものであり, 願望とは, 物事の“達成”を指向するのが普通であるから, “動作の継続”を表わす-거지라ではなく, “動作の終了”即ち“達成”を意味し得る-아/어지라가用いられるのが自然であると。

中世朝鮮語の지라系語尾に関するいくつかの問題

- 5) 장윤희 (2002:189) にも同様の指摘がある。
- 6) 高永根 (1980:98) にも例外に対し「‘可可能’に所属させた ‘2. き저다/き야다 3. き저지라/키야지라’ にも ‘어’ の選択に若干の例外が存在しているが、これも ‘거’ が ‘어’ へ統一され、語形が変貌したり、消滅する過程を予想させる重要な証拠になりうる」と説明している。
- 7) -오/우-については李崇寧 (1960), 허웅 (1975), 中島仁 (2002), 나카지마[中島仁] (2003) などを参照。連体形にあわられた場合には「主体法」や「対象法」の先語末語尾とも言われる。
- 8) 時相の接尾辞のうち、不定と現在を除く-터-と-거-の場合は、-터- : -다-と-거- : -가-の対立は中世朝鮮語の段階ではほぼ失われている。李崇寧 (1960), 허웅 (1975), 中島仁 (2002), 나카지마[中島仁] (2003) などを参照。
- 9) 『三綱行實圖』は漢文原典が付属しはするが、漢文にあらわれない文があらわれるなど、かなり自由な翻訳であり、いわゆる「諺解体」でないという点などで他の資料と異なる性格を持つ。『三綱行實圖』の資料的性格については志部昭平 (1990) を参照。
- 10) 장윤희 (2002:133,185) に同様の議論がある。
- 11) ただし、-거-があらわれる語尾の全てに母音調和が見られるわけではなく、가系の語尾があらわれない-거늘, -거든のような形も存在するのが問題となる。장윤희 (2002:185-186) にも同様の指摘がある。しかし、高永根 (1980) では、아/어と가/거が他動詞：非他動詞と規則的に結合する可可能に分類されたものは、本稿で扱った지라系語尾と키저다/키야다の2つしかない。키저다には키가다という形も存在する。아/어と가/거との対立が既に不規則的になっているものにおいては、母音調和も失われ、거系の語尾のみがあらわれていたとも考えられる。ただし、これについてはさらに詳細な資料の調査と研究が必要とされる。

(湘南校舎・第二类・コリア語)